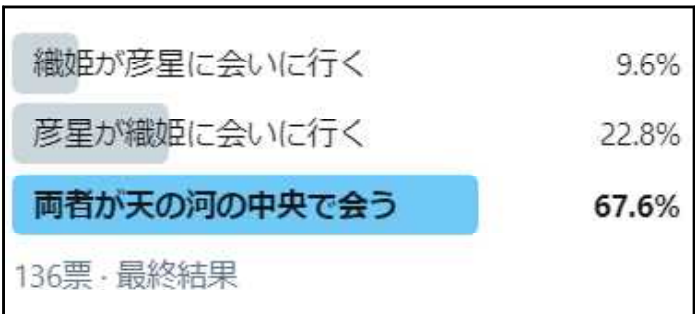


# 七夕の比較文学

武蔵野大学文学部日本文学文化学科 茂野智大



↑七夕に2人が会う場面のイメージについて、  
Twitterでおこなったアンケートの結果



## ▼『藝文類聚』所引「統齊諧記」

七月七日、織女当<sup>レ</sup>渡<sup>レ</sup>河……問曰、織女何事渡<sup>レ</sup>河。答曰、織女暫<sup>レ</sup>詣<sup>レ</sup>牽牛<sup>一</sup>。

七月七日、織<sup>レ</sup>女河を渡るに当<sup>レ</sup>る……問ひて曰く、織女何事あつてか河を渡る、と。  
答へて曰く、織女暫<sup>レ</sup>く牽牛に詣<sup>レ</sup>ると。

## ▼織女の交通手段（二）——王鑒「七夕観織女詩」『玉台新詠』

隱<sup>レ</sup>隱<sup>レ</sup>驅<sup>レ</sup>千乘<sup>一</sup>、闐<sup>レ</sup>闐<sup>レ</sup>越<sup>レ</sup>星河。

隱<sup>レ</sup>隱として千乗を駆り、闐<sup>レ</sup>闐として星河を越ゆ。

## ▼織女の交通手段（三）——応劭『風俗通』

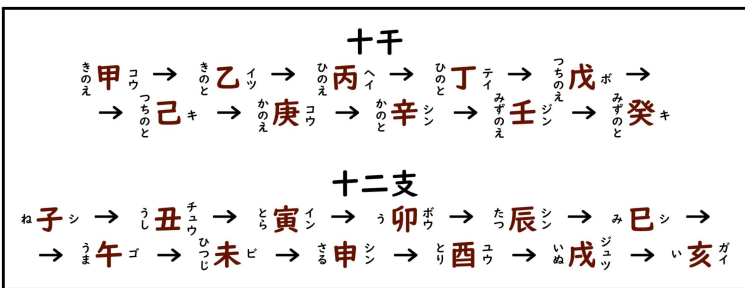
織女七夕当<sup>レ</sup>渡<sup>レ</sup>河、使<sup>レ</sup>鵲<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>橋。

織女七夕に河を渡る当<sup>レ</sup>り、鵲<sup>レ</sup>をして橋を為<sup>レ</sup>らしむ。

▼ 『萬葉集』の七夕歌

(1) 天の川安の川原に定而神競者磨待無  
この歌一首、庚辰の年に作る。  
右、柿本朝臣人麻呂が歌集に出づ。

(10・二〇三三 柿本人麻呂歌集)



(2) 天の川梶の音聞こゆ彦星と織女と今夜逢からしも (10・二〇二九 柿本人麻呂歌集)

(3) 天の川霧立ち渡り彦星の梶の音聞こゆ夜のふけ行けば (10・二〇四四 作者未詳)

(4) 織女し舟乗りすらしまそ鏡清き月夜に雲立ち渡る (17・三九〇〇 大伴家持)

(5) 天の川棚橋渡せ織女のい渡らさむに棚橋渡せ (10・二〇八一 作者未詳)

(6) はたものの踏み木持ち行きて天の川打橋渡す君が来むため (10・二〇六二 作者未詳)

▼ 年に一度の逢瀬……と思いきや——閏七月

契ありて同じ七月の数そはば今宵も渡せ天の川舟

(『続千載和歌集』 4・秋上・三五六 吉田定房)